

巻頭言（2012年11月号）

理事長 新谷友良

「内耳再生医療と i P S 細胞」

京都大学の山中教授が i P S 細胞の研究でノーベル生理学・医学賞を受賞したニュースが伝わりました。ノーベル生理学・医学賞は 25 年ぶり、活気がなかった日本には久しぶりの朗報です。

再生医療については、協会が主管した平成 16 年の全難聴福祉大会で「再生医療について」という分科会を設けて、神戸市立中央病院の内藤先生を迎えての講演がありました。そのときは i P S 細胞の話は未だなく、内耳の幹細胞（決まった臓器や神経などに分化できる細胞）を使って内耳再生を行うお話でした。その時も内藤先生は、臓器移植や他人の幹細胞を使用して行う医療の倫理的な問題をお話しになりました。i P S 細胞は自分の細胞なので、この倫理的問題をクリアーするようなイメージがあったのですが、「マウスの i P S 細胞から卵子を作り出し、体外受精を行ってマウスを誕生させる」とか「ヒトの i P S 細胞から精子や卵子の元になる細胞を作ることに成功した」などの報道に接すると、i P S 研究が生命の誕生と関係する倫理的な問題の大きさを感じます。山中先生の談話などを新聞で読みますと、i P S 技術の実用化のためには何段階もの臨床実験と倫理問題の解決が必要なようです。また、記事を読んでいてガン細胞が i P S 細胞と非常に深く関連していることを勉強しました。「ガンは特定の部位（臓器や骨や神経など）の細胞が、臓器や骨や神経の一部として再生されていく情報を失い、無秩序な細胞分裂を繰り返していく状態。i P S 細胞は特定の細胞への再生情報を初期化するので、ガン細胞と似たような状態にある」と山中先生のお話を素人的に理解したのですが、医学的な専門知識をお持ちの方がおられましたらご教授いただきたいと思います。

内耳の再生医療は、私たち高度・重度の聴覚障害者が待ち望むもので、i P S 細胞を使った再生医療が期待される先行分野の一つと言われていますが、山中先生が自戒的に述べられていたように i P S 研究は「未だ一人の人も救っていない」状態。基礎的な研究の成果は性急な結果を求めるものではなく、何十年後から見た時「あの時のあの研究が今の結果を生んだのだ」というように、振り返り、遡りながら評価されるものかもしれません。